

第三百十五回 青葉会

平成二十四年六月二十八日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 今井紀久男 小川恭延 柿崎忠彦 小西弘子 豊田ゆたか 福島正明 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉 伊賀山そらお 石川清 大林猛 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 中野一灯 橋口隆

古田昇 南平和夫 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 星田啓子 山崎青史

山本三恵

ゴシックは選者の天

《選者吟》

梅雨籠り独りが好きの淋しがり
村外れ半夏生から振り向かれ

万里子 (堅・弘・ゆ・允)

命日の夜更け熟梅落つる音

全 (隆・啓)

紫陽花の殖えし故郷の無人駅

全 (垂)

ばら万花歩々に容(かたち)や色変り

全

《互選句》

七点 ☆ 甲斐駒の影浮ぶまで田水張る

一灯 (万・孤・敏・ゆ・允・亜・青)

(青:きれいな風景。「浮ぶまで」の「まで」が上手い)

☆ 良案を探がしあぐねる団扇かな

正明 (万・堅・紀・忠・孤・青・天)

(青:上手い句です。但し「探がし」は「探し」)(天:良案↓名案)

☆ 早苗饗の棚田に揃ふ膝小僧

盛雄 (万・恭・孤・弘・龍・允・啓)

叔母の一周忌

六点 ☆ 梅雨晴れ間喪主ぼつねんのお斎かな

紀久男 (万・忠・弘・敏・天・三)

☆ 梅雨入りや閑居の不善たくらまん

恵洲 (万・龍・ゆ・亜・天・三)

人情を大切にするソーダ水

正明 (孤・弘・隆・亜・天)

☆ なめろうの味噌加減よく冷の酒

亜也 (万・堅・敏・隆・天)

☆ 緑蔭の風や歩調も甦る

恭延 (万・堅・紀・孤)

梅雨深し小太鼓の音見番に

弘子 (紀・允・亜・天)

アマゾンで山家集買ふ梅雨の入り

忠彦 (龍・正・三)

黄あやめの肩落してや金色堂

弘子 (忠・孤・啓)

梅雨湿り米粒こぼしつ研ぐ夕べ

ゆたか (弘・龍・三)

☆ 目の限り浜まで瓦礫梅雨の月

一灯 (万・紀・允)

戻り梅雨新幹線の軌条錆

和夫 (ゆ・亜・三)

「葛桜」文字に惹かれて二ツ買ふ

亜也 (紀・ゆ・正)

☆ 梅雨晴間お宮参りの大太鼓

天牛 (万・敏・正)

二代目猿翁襲名

二点 澤瀉(おもだか)や必死につとむる声仕草

紀久男 (恭・敏)

揺り椅子に本読む青年夏館

弘子 (龍・正)

紫陽花や変わり身得手の猿芝居

ゆたか (紀・青)

剥落の古仏に黴の混じりけり

昇 (隆・正)

夏めくや週末混雑朝六時

亜也 (恭・龍)

父の日や嫁にもらひし洒落たシャツ

天牛 (弘・敏)

ママ求め泣く児の顔は汗まみれ

そらお (紀)

治療受く窓辺に癒す額の花

清 (堅)

逃げ惑ふ母子(おやこ)の椅子に百足(むかご)かな

全 (隆)

一点

上方落語の会

めりはりなき高座苦痛や梅雨曇
梅雨晴れを刻々変える茜雲

紀久男 (忠)

青葉また青葉織り成し溪覆ふ

猛 (堅)

児の散歩夏帽色はクラス毎

全 (啓)

明易や静座し測る血圧計

恭延 (忠)

☆ 六月やシャンソンに聴く雨の唄
どこまでも地震の傷跡梅雨深し

忠彦 (ゆ)

(氣仙沼)

全 (允)

紫陽花や傘廻しつっ佳人笑む

健介 (紀)

☆ 緑蔭に空襲体験聞かせゐる

惠洲 (万)

五月晴若やぐ禰宜の祝詞かな

堂哉 (隆)

手術了え緑濃やか夏の朝

全 (紀)

(青：) 無事でないよりです。「緑」と「夏」は季重なりです

紫陽花や昨日の約束今日は反古

ゆたか (青)

(青：) 民主党のマニフェスト？七変化とも言われる紫陽花が効いている

夏草や道ながら説く老教師

隆 (紀)

涼しさや芭蕉通りし旧街道

全 (忠)

あの日から白色ばかり七変化

正明 (三)

梅雨晴間古い梅酒を毒見する

全 (啓)

風の扉に弾けて消ゆるシヤボン玉

昇 (恭)

花に酔ひ絆確かな従兄弟(いとこ)会

和夫 (恭)

雨だれの音してシヨパン聞く梅雨入(ついで)

規雄 (紀)

露を採る時に犬猫立ち入るも

亜也 (恭)

初鰹まず火で炙り叩きけり

天牛 (忠)

部屋にあう額縁を買ひ更衣

全 (正)

鱧食はす八丁堀の小料理屋

全 (正)

無重力なりし山田や蛍舞ふ

盛雄 (紀)

(北兵庫 久美溪にて)

● 次回青葉会

七月二十六日(木) 午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲ 当季雑詠各自五句。投句は二句

八月二十三日(木) 談話室

九月二十七日(木) 全

以上 文責 紀久男

平成二十四年六月句会報

一 今回は万里子先生以下9名出席。投句12名。御覧のように正明さん、一灯さん、盛雄さんの三名が高得点で並びました。盛雄さんから送られてきた「兵庫俳壇年刊句集57」（平成23年兵庫県俳句協会）と新刊情報・・五郎太さん、亜也さんも執筆された「フランス人の流儀」（日仏経済交流会編・大修館書店）、「倫敦から来た近代スポーツの伝導師」（高橋孝蔵著。小学館101新書）、「事例でわかる国際企業法務入門」（安江英行・劉新著。中央経済社）、「食料危機にどう備えるか」（柴田明夫著。日経新聞出版社）を回覧。

五郎太さん（パリクラブ会長）から隆さんへのメールによりますとハーバードの夏季スクール受講の為二ヶ月句会を休みますとのこと。先生から海鮮チヂミ、弘子さんの和菓子（富山の「蛸」と郡山の「ままだおる」）、小生の吟醸「笹の川・ほろ酔」（郡山）を賞味し乍ら亜也さんの進行役で順調に終了しました。

二 関係者近詠

梅東風や時計回りの豆電車 万里子 みどりごへ雛のいのちの継がれけり 孤舟

老梅の松に凭れて花盛り 全 春風や嬰の肌着を高く干す 全

象はな子鼻を振りづめ花の昼 全 得意満面プードルの花衣 全

思ひ立ち手ぶらの花見この人と 眞希子 そよ風が船頭となる花筏 全

幼きも若きも老も染卯 全 遺言を書きたき今日の隴月 全

合格し叶ふ上京初パーマ 全 「爽樹」七月号

ペロ藍といふ青以てして春の潮 弘子 この星を彷徨ふ魂へ花褥 盛雄

漁舟どちアンテナつんつん花大根 全 野も海もひとつの棺花筏 全

掬ひては母に掲げる水と蝌蚪 全 村ぐるみ故郷去る日やませ吹く 全

苺煮る魔女のごとくに鍋覗き 全 黙禱を終えし後から蟻動く 全

鯉幟風に吹かれて尻尾巻く 和夫 老いてのちの疎開さびしき溽暑かな 全

千両に万両加へ活けにけり 全 糸瓜棚去りし昭和を呼び戻す 全

花冷や小籠包に爛つけて 紀久男 「兵庫俳壇年刊句集」より（平成23年）

小緩鶏め園丁の靴突つきをり 全 桃の里拡声器から喪の知らせ 丹野敦雄

ミサイルが咲き桜咲く空騒ぎ 忠彦 「俳句」七月号 伊藤伊那男選

雨乞うて行く鎌倉の濃紫陽花 昇 妻留守のひとり碁を打ち星涼し 允章

暑気払ひと言つては集ふ飲み仲間 全 滾々と流るる水や花菖蒲 全

三「兵庫俳壇年刊句集57」より小生好みみの句を抄出してみました 暑気払ひと言つては集ふ飲み仲間 全

生き延びている桜を見蟬を聞き 伊丹三樹彦 みちのくの旅今年米家苞に 延吉富子

御ひいきのまねき見上げる時雨傘 井上令子 乱れ箱の内張りの和紙近松忌 樋口進二

初芝居宝づくしの衣裳着て 金田美恵子 名取りの名まだ馴れずして寒ざらへ 水口祭

三月や抱き切れざる喪を連れて 小泉八重子 朴の木を伐りし悔ある端居かな 森田峠

暗すぎる万緑ありて遠き地震 全 秋は旅人天香久山過ぎてより 和田悟朗

羽子板の押絵歌舞伎の爛熟期 後藤比奈夫 したたれる洞に髑髏の目の空ろ 亘 余世夫

反骨のなき俳諧や破蓮 土肥幸弘

四 黛まどか「引き算の美学」（毎日新聞社2012/2/25 ￥1,800）より

2010年4月から一年間、文化庁から文化交流使としてフランスに派遣され、パリを拠点に活動。

月一回催した俳句講座では副島綾子さん（副島先輩の長女）が通訳された模様。受講したフランス人の作品の直訳と講師まどかの意訳を一句紹介します。

Jus doré des coings Dans la bassine de cuivre
Feu soleil d'automne Monique Serres

マルメロの金色の汁 銅製のなべに 秋の太陽の炎（＝亡き秋の太陽）――副島綾 訳

マルメロに秋陽溶けゆく銅の鍋 ―七五調に意訳

七月十四日

紀久男記

以上